

小説における指示副詞「コウ」「ソウ」の後続表現

ー発話動詞・思考動詞に係る場合ー

張 子如

1. 問題の所在

指示代名詞「コレ」「ソレ」、指示連体詞「コノ」「ソノ」の研究が数多いのに対して、指示副詞「コウ」「ソウ」は、文法的考察・文章論的考察はいずれも遅れている。本稿は文章論的観点から「コウ」「ソウ」を考察する。

「コウ」「ソウ」の文章論的観点からの研究として、佐久間(2002)と馬場(2006)の考察が挙げられる。佐久間(2002)は文章・談話における統括機能という観点から「段頭の」「コ系の指示詞」が特に連段の場合、「広域の機能領域を強調して指し示し、大きな統括力を有する」とした。それに対し、段中・段末に多い「ソ系の文脈指示詞」にも、ある程度は段の統括機能があり、統括力は相対的に弱いが、統括機能の質的な相違がある」と述べている。また、馬場(2006)は指示語系接続表現「こうして」と「そうして」の置き換え可能性を通して、両者の用法の重なりとずれを考察している。先行文の内容と後続文の内容が継起的である場合、両者の用法の重なりが認められるが、「こうして」の場合は結果性の意味が前面に出ており、「そうして」の場合は継起性的の意味が前面に出るという違いがあると指摘している。本稿では、これらの指摘をうけつつ、指示副詞「コウ」と「ソウ」の機

能の違いを具体的に明らかにしたい。

本稿では、小説の地の文に多く見られる発話動詞・思考動詞(以下、「発話・思考動詞」と略す)に係る場合の「コウ」「ソウ」を対象として考察する¹⁾。その後続内容との文脈上の関わりを分析することを通して、両者の文脈展開における機能の相違点を指摘することを目的とする。たとえば、次のような例が見られる。

○「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定っていう位だから」

奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしくこう云った。(「こころ」)

○三原は何気なしにそう言った。そう言ってしまった、三原自身が、電気にでもかかったように、はっとした。

(「点と線」)

「いった。」に係る場合、「こう云った。」と「そう言った。」は両者とも前方照応で、一見同じように見えるが、発話・思考動詞とその後続内容との関わりを考察すると、「こう云った。」の後続内容は当小説の第三十五節で、別の話題に入り、先行の場面と完全に変わるが、「そう言った。」の後続内容は発話行動の主体が行った行動であり、前後の行動は継起的に行われているのである。

このように、「コウ」と「ソウ」に係る発話・思考動詞が「た。」で文を終止するとき(以下、「た。」と略す)、その直後の内容

は先行文と行動が継起して緊密な場合もある。その後続の文脈の内容を検討することによって、「コウ」と「ソウ」の文章展開上の機能の違いを見出すことができると考える²⁾。

そこで、本稿では、「コウ」「ソウ」が「発話・思考動詞+『た。』」に係る場合を取り上げ、後続文との内容上の関わりから、「コウ」と「ソウ」の違いを考察する。なお、CD-ROM版『新潮文庫の100冊』に収録された小説を資料とする³⁾。

2. 「コウ」「ソウ」の後続の発話・思考動詞「た。」

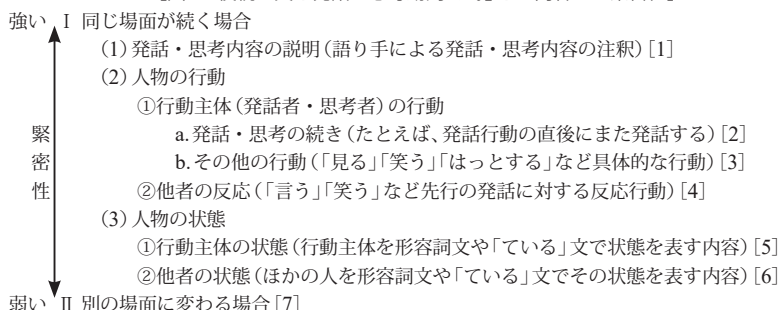
本稿では、発話・思考動詞「た。」の直後の一文の内容と先行文との関わりを考えて、「Ⅰ場面が続く場合」と「Ⅱ場面が変わる場合」とに2分する。「Ⅱ場面が変わる場合」は、文脈上の大きな切れ目であり、場所の転換、登場人物の入れ替わり、長い時間の経過などである。本稿では、これらを基準とする他に、内容にまともりをつける「コウ」に伴う表現効果として、切れ目が生じる場合があると考え。後続文と先行の発話・思考との関わりの強さから考えて、【図1】[1]～[7]

のように7種に細分する。

図1において、Ⅰ(2)の①a、b、と②の三種類は発話・思考に継起する行動を表す内容が続く。(3)は発話・思考が行われた時点における人物の状態の描写であり、行動主体も他者も同一場面に存在する。Ⅱは、時間・空間・人物などが変わる、いわゆる場面転換が見られる場合である。これらの分類の中、Ⅰの(2)は行動の継起の代表的な場合であり、Ⅱは文脈の切れ目の代表例である。Ⅰの(1)と(3)は行動の継起でないため、時間的な展開が見られない場合である。(1)は発話・思考内容についての説明であるため、先行の発話・思考と内容上においては切れない緊密な関係である。(3)は発話・思考が行動として終わっており、人物の状態についての描写へ移行する場合で、行動の描写から状態の描写へ移るため叙述の質の違いがあり、その意味で、叙述の切れ目が生じる場合である。また、Ⅱは切れ目の典型である。

このように、後続文が発話・思考(行動と内容を含めて)との関係が緊密であるかどうか、また、後続内容は行動の継起性を持っているかどうかという二つの観点から、以下の分析を行う。

【図1 後続一文と発話・思考動詞「た。」との内容上の緊密性】



【表1 発話・思考動詞「た。」後続一文の内容と先行内容との関わり】

	前 方 照 応								後 方 照 応	合 計
	Ⅰ 同じ場面						Ⅱ 別の場面	小 計		
	(1) 発話・思考 内容の説明	(2)人物の行動		(3)人物の状態						
		①行動主体	②他者の反応	①行動主体	②他者					
		a 発話・ 思考の 続き	b その他 の行動							
コウ	0	0	2	7	4	3	6	22	42	64
ソウ	18	17	14	47	0	1	5	102	0	102

上記の観点と分類をもとに、発話・思考動詞「た。」の後続内容として、直後の一文を調べた結果が【表1】である。

発話・思考動詞「た。」の直後の文脈内容が「発話・思考内容の説明」「発話・思考の続き」「その他の行動」「他者の反応」である時、「ソウ」がより多く見られる。一方、「他者の反応」「人物の状態」「別の場面」である時、「コウ」が比較的多く見られる。要するに、「他者の反応」の時に両者とも多く用いられる以外に、「ソウ」の場合は、先行の発話・思考についての説明や発話・思考に続く継起的な行動が後続しやすい。それに対して、「コウ」の場合は、後続内容は状態や別の場面が多く、継起的な行動が少なく、場面転換など大きな切れ目もできるという傾向が見られる。後方照応の場合は「コウ」のみが用いられ、前方照応の場合とは機能的に異なっていると見られるので、2.7節および3節で検討する。

以下、発話・思考動詞「た。」の後続の文脈内容を種類別に考察し、「コウ」と「ソウ」との文脈展開における具体的な異なりについて検討する。

2.1 「発話・思考内容の説明」の場合

発話・思考動詞「た。」の後続内容が「発

話・思考内容の説明」である場合は、いずれも「ソウ」(18例)が用いられ、「コウ」が見られない。

- (1) 祖母のトセは、信夫が台所にみだりにはいることを、きびしく禁じていた。

(略)

「男子には男子の分があり、女子には女子の分があるので。男子はお上に忠義をつくし、家の誉れをあげることを考えていればよいのです」

台所に顔を出すと、トセは必ずそういった。もっとも、トセのお上は天皇になったり、徳川様になったり、定かではなかったが。（「塩狩峠」）
「そういった。」の後続文「もっとも～」なかったが。」は、トセの発話中の「お上」についての語り手による説明である。このように先行文についての補足・説明が行われる場合の後続文は、先行文との間に緊密な関連を持っている。こうした場合に、「ソウ」が用いられることが多い。

2.2 「行動主体の発話・思考の続き」の場合

発話・思考動詞「た。」の直後に、また同じ行動主体の発話・思考行動が続く

場合である。発話・思考の連続ともいえる。この場合も「ソウ」(17例)だけが用いられ、「コウ」の例が見られない。

(2) 慈海は、里子のいう意味がわかるとお、そうか、そうかと口走って、裾をかきあわした。このときも慈念の表情はひっこんだ白眼の部分を瞬間だけ動かしたにすぎない。

〈強情な子やなア〉里子は和尚のほどけた帯をうしろから締め直しながらそう思った。

〈けったいな子やなア、何おもてはんのやろ、さっぱりわからん!〉

(「雁の寺」)

行動主体である里子は〈強情な子やなア〉と「そう思った。」の直後に、〈けったいな子～さっぱりわからん!〉という思考が続く。この場合は緊密な思考行動の連続である。

このように、「た。」の直後が発話・思考の続きである場合は、前後の行動が継起的に行われる場合であり、「ソウ」が用いられやすいのである。

2.3 「行動主体のその他の行動」の場合

発話・思考動詞「た。」の直後の文に同じ行動主体の「見る」「笑う」「はっとする」など行動を伴う表現が見られる場合である。この場合、「ソウ」が14例見られるのに対して、「コウ」は2例のみである。

(3) 「東京駅も、さぞホームが汽車で混雑していることでしょうね」

目前の光景から、鳥飼は、まだ見ない東京駅を空想して言った。

「え。そりゃ、たいへんです。ホームは列車の発着が、ひっきりなしですよ」

三原は何気なしにそう言った。そう言ってしまうと、三原自身が、電気にでもかかったように、はっとした。彼は、ある重大な事実と思いあたったのである。(「点と線」)

「そう言った」の後続文で「はっとした」という心情描写が行われ、三原の言語行動と心情行動との継起性が示されている。この点で「ソウ」の前後の内容は緊密に関連しているといえる。

「コウ」の場合は2例のみ見られる。

(4) 父は眼を開けて、そこに並んでいる人の名前を母に尋ねた。母があれは誰、これは誰と一々説明して遣ると、父はその度に首肯いた。首肯かない時は、母が声を張りあげて、何々さんです、分りましたかと念を押した。

「どうも色々御世話になります」

父はこういった。そして又昏睡状態に陥った。枕辺を取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。(「こころ」)

「父はこういった。」の後続内容は「そして又昏睡状態に陥った」で、「いった」と「昏睡状態に陥る」のは同じ主体が行った行動であるが、二つの行動の間に時間の経過を読み取ることができる。もう1例も「こころ」にあり、「父は口ではこう云った。こういったばかりでなく、今まで敷いていた床を上げさせて、何時ものような元気を示した。」で、「云」う行動から「床を上げさせ」るまで時間の経過があり、短時間の継起的行動ではない。このように、「こういった。」の直後には同じ主体の連続的な行動が出現しにくい。

以上見たように、発話・思考の直後に、

同じ主体の次の行動が行われる場合、前後の行動は継起的な行動の連続であり、「ソウ」が用いられやすいのである。

2.4 「他者の反応」の場合

発話・思考動詞「た。」の後続内容が「他者の反応」である場合は、「コウ」は7例、「ソウ」は47例であった。両者とも多く見られる。次の「ソウ」の例を見てみよう。

(5)「済まないことね、学生さんに働かしちゃあ」

とお千さんは、伊達巻一つの艶な蹴出で、お召の重衣の裾をぞろりと引いて、黒天鵝絨の座蒲団を持って、火鉢の前を逃げながらそう言った。

「何、目下は私たちの小僧です」と、甘谷と言う横肥り、でぶでぶと脊の低い、ばらりと髪を長くした、太鼓腹に角帯を巻いて、前掛の真田をちょきんと結んだ、これも医学の落第生。追って大実業家たらむとする準備中のが、笑いながら言ったのである。 (「売色鴨南蛮」)

お千さんは「そう言った。」の直後に、甘谷が「何、目下は私たちの小僧です」と発話した。お千さんの発話に対する反応として甘谷が発話し、同じ場面にいる人物の継起的な行動である。

このように、主体が発話・思考行動を行った直後に、相手など同じ場にいる人がその行動に対する反応として、何らかの行動を行う。つまり、発話・思考によって、相手の反応が呼び起こされ、一連の発話行動などが起こるという形の継起的な行動であると考えられる。

一方、「コウ」の場合は、どのように用いられているのであろうか。

(6)「あのひと、まだここにいるの？」

鮎太は加島もまた、今朝あの馬車で帰ったものとばかり思っていたので、こう訊いた。

「勿論、いるわよ。わたしがいるんだもの」

そう言った冴子の眼は、いつになく熱っぽくきらきらしていた。

(「あすなる物語」)

鮎太が「こう訊いた。」の直後に冴子の発話が来る。鮎太の質問に対する回答で、問いかけられる時の反応である。これは、「ソウ」が用いられる場合とどう違うのであろうか。「～ので、こう訊いた。」は説明的な口調であり、鮎太のこの発話を取り立てて表現されている。(5)のように単なる描写と違い、説明的な表現で、先行の発話主体の発話が強調され、まとまりをつけている。このまとまりをつける表現の効果として切れ目が生じると考えられる。この点は後に3節で詳述する。

このように、「ソウ」が用いられる場合は、短時間の行動の継起と理解されるのに対して、「コウ」が用いられる場合は、継起的である点は「ソウ」と同じであるが、先行の行動主体の発話・思考にまとまりをつける点に違いが見られると考えられる。

2.5 「人物の状態」の場合（行動主体と他者）

発話・思考動詞「た。」の直後に、行動ではなく、形容詞文や「ている」文で「行動主体の状態」と「他者の状態」を叙述する場面が見られる。本節では両者を「人物の状態」の場合として分析する。「コウ」は総計7例であるが、「ソウ」は1例の

み見られる。

「コウ」の場合に、行動主体の状態が4例、他者の状態が3例見られる。

- (7)「何とも、忝うござった。もう、十分頂戴致したて。——いやはや、何とも忝うござった」

五位は、しどろもどろになって、こう云った。余程弱ったと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思われない程、汗が玉になって、垂れている。（「芋粥」）

- (8)「おれの様な人間だって、月給こそ貰っちゃいないが、これでも遊んでばかりいるんじゃない」

父はこうも云った。私はそれでもまだ黙っていた。

「御前のいう様な偉い方なら、きっと何か口を探して下さるよ。頼んで御覧なのかい」と母が聞いた。

「いいえ」と私は答えた。

（「こころ」）

(7) は発話の直後に、その行動主体の状態、つまり「余程弱ったと見えて、～垂れている」という内容が来る。(8) は発話の直後に、発話者の相手である「私」の「それでもまだ黙っていた」という状態を表す内容が続く。このように、(7) と (8) は後続文に行動ではなく、発話者の状態、または同じ場にいる他者の状態が描写されている。先行の発話と同じ場面ではあるが、継起的な行動ではなく、人物の状態の描写が続く。

「ソウ」の1例は「塩狩峠」にある「菊はそう言った。信夫は何となく釈然としなかった。」という例である。「ソウ」が用いられ、直後に他者である信夫の心理状態についての内容が続く。

この場合は、継起的な行動ではなく、場面を停止し、人物の状態について描写する部分において、「コウ」が多用されていることが分かる。

2.6 「別の場面」の場合

発話・思考動詞「た。」の後続内容が「別の場面」である場合、「コウ」は6例あるのに対し、「ソウ」は5例見られる。それぞれの「た。」の総数から見れば、「コウ」のほうがより高い比率を占めている。

まず、「コウ」の例を見てみよう。

- (9) ——無理に短うしたで、病が起ったのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような恭しい手つきで、鼻を抑えながら、こう呟いた。

翌朝、内供が何時ものように早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や橡が、一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたように明い。（略）

（「鼻」）

内供は「こう呟いた。」の直後は、改段され、翌朝の新たな場面に移行している。文脈上、大きな切れ目が生じている。「コウ」を使用することで、「呟いた。」は場面を取り立てる強調的な表現となり、この発話の部分が一つのまとまりになる。この場合、「コウ」を含む部分は、それまでの文脈を統括し、1つの場面的まとまりを形成する効果を果していると見られる。

次のように、「ソウ」の使用に場面転換が見られるものもある。

- (10) この言葉ははげしく私を刺し、いたたまれぬ気持ちにさせた。（略）

「二組別々にどこかへ身を隠そうよ。二時間たったら又この東屋へ

かえって来よう」

柏木が、まだ飽きもせずブランコに乗っている男女を見下ろしながら、そう言った。

柏木や令嬢と別れた私は、下宿の娘と共に、東屋の丘から北へ降り、また東のほうへ迂回してゆく緩い坂を登った。（「金閣寺」）

柏木が「そう言った。」の直後には一行の空白があり、場面の転換が見られる。その次の一文に「私」が「東屋の丘から～坂を登った。」は、先行の柏木の発話場面から転換し、別の場所へ移動したという内容である。しかし、先行の発話を特に強調せず、中立的に叙述しているのである。また、次の場面の初めの、「柏木や令嬢と別れた私」には、先行文をふまえて時間経過が感じられる。その他の4例のうち、2例は別の章に入り、他の2例は翌朝のことや宴会の場が終わってからのことが叙述されている。いずれも時間が経過した上で別の場面が変わる場合である。用例は略すが、これらの例の「そういった。」も特に内容を強調せず、後続の内容に続けている場合である。

このように、「別の場面」の場合、「コウ」が「ソウ」より多用され、文脈の大きな切れ目が生じやすい。これに対して、「ソウ」が用いられるのは、場面が変わるとしても、中立的に内容が叙述されており、先行の発話・思考が特に強調されず、淡々と後続内容が続く場合である。

2.7 後方照応の場合

後方照応は「コウ」にのみ見られる。発話・思考動詞の95%は「いう」である。

「こういった。」の直後の内容はその発話内容であり、「こういった。」は直後の発話内容を統括している。前方照応の場合は、その発話内容は先行文脈にあり、「こういった。」「そういった。」という行動は常にその発話内容と一体のものとして解されるため、後方照応の場合も、後方に示される発話内容と一体のものとして解されるべきである。そこで、発話内容の直後の一文の内容を分析する必要がある。その内容を整理すると、【表2】のようになる。

【表2 発話・思考内容の後続一文の内容と先行内容との関わり】

発話・思考 内容の説明	行動主体		他者		別の場面	合計
	発話・思考の続き	その他の行動	反応行動	状態		
0	0	2	23	12	5	42

【表2】に見られるように、最も多いのは「他者の反応行動」と「他者の状態」の場合で、「別の場面」も5例ある。行動主体の「その他の行動」も2例見られるが、「発話・思考内容の説明」と行動主体の「発話・思考の続き」の例は見られない。つまり、後続内容は「他者の反応・状態」と「別の場面」が来やすく、行動主体の発話・思考行動と発話・思考内容が一応終わって、一つの部分としてまとまりが付けられている傾向が分かる。例(6)で見たように、「コウ」で発話・思考内容を統括し、内容にまとまりを付け、相対的な完結性を保っているのである。

(11) ややあって、秋山小兵衛がこう
いった。

「御苦労だったな、ほんとうにありがとうよ。あとはおれがすること

だ。お前に礼をするのも水臭いことだし……いずれ折を見て、お返しをさせてもらおう。おかみさんと坊やに、よろしくいっておくれ」

（「女武者者」）

（11）の後続内容は当小説の第六節になり、完全に別の場面に入る。

（12）和臼の男は、こう言った。

「私は二両連結の前部に乗っていましたがね、鼠色の防寒コートの人二人いましたよ。一人は四十歳ぐらいの人、一人は二十六七歳でした。でも、その両側は会社帰りらしい女の子でした。濃紺のオーバーの男というのはいなかったように思います」

重太郎は、ポケットからお時の写真を出して見せた。（「点と線」）

和臼の男の「言った」内容の直後に、重太郎は「ポケットからお時の写真を出して見せた」という内容が続き、発話内容の直後は他者の反応行動である。同じ場面で行われた行動であるが、後続の行動は先行の発話の主体ではなく、他者の行動である。

以上の「別の場面」と「他者の反応・状態」以外、発話主体の「その他の行動」も2例見られる。

（13）隣で汲んでいる女子が、手早く杓を拾って戻した。そしてこう云った。「汐はそれでは汲まれません。どれ汲みようを教えて上げよう。右手の杓でこう汲んで、左手の桶でこう受ける」とうとう一荷汲んでくれた。

（「山椒大夫」）

「こう云った」行動と後続の「汲」む行動は同じ主体が行ったのである。後続文

の「とうとう一荷汲んでくれた」との間には、「一荷」汲むための時間が必要である。ここでもやはり時間の経過が読み取れる。もう1例は「金閣寺」にある。発話内容に「歌でもうたいましよう」という表現があり、直後に行動主体が「うたいはじめた」という内容が続く。この1例は例外的なものと考えられる。

このように、後方照応の場合、「コウ」で直後の発話・思考内容を統括し、内容にまとまりを付け、一種の完結性を保っているのである。その結果として、後続内容との間に切れ目が生じることになる。

3. 「コウ」のまとめる機能と「ソウ」の継続させる機能

前節の分析によって、「発話・思考内容の説明」「発話・思考の続き」「その他の行動」が後続する場合は前後の内容が緊密に関わっており、「ソウ」が用いられやすいことが分かった。特に、「発話・思考の続き」「その他の行動」「他者の反応」は行動の継起を表しており、「ソウ」が多用されている。要するに、発話・思考内容についての説明で先行内容が一区切りとして終わらず、完結性を持っていない場合、または行動の継起が表されている場合、「ソウ」が多く用いられる傾向がある。

一方、「人物の状態」「別の場面」が後続する場合、「ソウ」よりも、「コウ」が多用されている。また、「コウ」において、後方照応の場合においても、前方照応との共通性が見られ、いずれも後続内容が「他者の反応・状態」と「別の場面」に偏っている。このような傾向の違いは、「コウ」が単に区切りの位置に用いられやすいと

いうだけではなく、「コウ」のまとまりをつける効果によって区切りの効果が発生していると考えるべきではなかろうか。

金水・田窪(1990)は「解説のコ」について、「中和的なソに対し、近称のコは明らかに文脈指示において有標であり、なんらかの強調的な効果をもたらす」と指摘したように、「コ」系は(6)(11)のような解説的な文脈において、強調的な効果を持つため、文中において、マーカーが付けられたような表現となる。そこで、「コ」系の部分が前後の文脈から浮彫のようにとりたてて表現され、一つのまとまりとして捉えられることになる。その結果、後続内容との繋がりが緩くなり、切れ目が読み取れることにもなる。一方、中立的な「ソ」系は無標であるため、そこに特に焦点が当てられず、淡々と前後の内容を繋ぐため、後続内容との間に切れ目が生じにくいのである。

「他者の反応」が後続する場合、「コウ」と「ソウ」が両方とも多く見られる。「ソウ」が用いられる時は、(5)のように前後は短時間の行動の継起と解されるが、「コウ」が用いられる時は、(6)と後方照応の(12)のように行動主体の発話・思考にまとまりをつけ、その結果として、心理的效果として小さな切れ目が生じると推測されるのである。

この結果、「コウ」と「ソウ」の性質の違いが原因で、「コウ」はまとめる機能を発揮する場合が多いのに対し、「ソウ」はその力が弱く、単に文脈を続ける場合が多いと考えられる。

4. まとめ

本稿では、小説の地の文における指

示副詞「コウ」「ソウ」に発話・思考動詞「た。」に係る場合、その直後の一文の内容との関係について考察した。

「コウ」は「他者の反応」「人物の状態」「別の場面」が後続しやすく、文脈において切れ目が生じる場合に用いられることが多い。つまり、場面の停止、登場人物の交替、時間上の大きな経過と場所の転換など文脈上に切れ目が見られる。一方、「ソウ」は「他者の反応」「発話・思考内容の説明」「発話・思考の続き」「その他の行動」が後続しやすく、行動の継起・連続、または補足的な説明が続きやすい傾向がある。「他者の反応」の場合、「コウ」と「ソウ」の用法の重なりが見られるが、「コウ」は行動主体の発話・思考にまとまりをつける点に違いが見られた。

これらを通して、発話・思考動詞に係る場合の「コウ」「ソウ」の文脈上に表れる機能の特徴をまとめると、単純に内容を承ける文法機能を持つ「ソウ」は先行内容をまとめる機能は弱い。そのため、先行文脈をそのまま後続内容に繋ぐ場合が多く、内容の切れ目に用いられることが少ない。それに対して、強調的に指示する機能を持つ「コウ」は文脈展開上の切れ目に用いられることが多い。文脈が継続的なところに用いる場合でも、まとまりをつける表現効果があるため、継起的な内容であっても小さな切れ目を生じることがあると考えられる。

注

- 1)「コウ」「ソウ」は修飾する動詞の性質によって用法が異なる。行動・作用の状態を表したり、行動や作用の結果の状態を表したり、発言・思考の内容を

表したりすることができる。また、後続のものと結合して接続詞や連体詞として用いられる場合もある。そのうち、実質的な副詞として、発話・思考に係る場合の「コウ」「ソウ」が最も多く見られる。

- 2)「コウ」「ソウ」の後続の表現を調べると、さまざまな形式が見られる。たとえば、「そう思った。」「そう思って」「そう思ったが」「そう思うと」などが見られ、形式が多い。その中の一つの形式に絞ったほうが、「コウ」と「ソウ」は比較が可能になるのではないかと思う。それらの形式の中に、「コウ」と「ソウ」はともに「た。」という形式の例が多く、また、「そう言った。」は「そう言って」の場合と比べると、「た。」の後は文が終止しており、形式上は先行叙述と明確な切れ目がある。本稿では後続の内容との関わりを考察するので、「た。」に絞って考察する。

- 3) 調査資料は以下の通りである(総計30編、約228万字)。

- 1.「こころ」(夏目漱石、1914年)、2.「山椒大夫」(森鷗外、1915年)、3.「高瀬舟」(森鷗外、1916年1月)、4.「鼻」(芥川龍之介、1916年2月)、5.「芋粥」(芥川龍之介、1916年9月)、6.「赤西蠣太」(志賀直哉、1918年9月)、7.「小僧の神様」(志賀直哉、1920年1月)、8.「売色鴨南蛮」(泉鏡花、1920年)、9.「痴人の愛」(谷崎潤一郎、1924)、10.「ある心の風景」(梶井基次郎、1926年)、11.「冬の日」(梶井基次郎、1927年)、12.「雪国」(川端康成、1935年)、13.「路傍の石」(山本有三、1937)、14.「ビルマの豎琴」(竹山道雄、1947年)、15.「二十四の瞳」(壺井栄、1952年)、

- 16.「あすなろ物語」(井上靖、1953年)、17.「金閣寺」(三島由紀夫、1956年)、18.「パニック」(開高健、1957年)、19.「点と線」(松本清張、1958年2月)、20.「不意の啞」(大江健三郎、1958年)、21.「樹々は緑か」(吉行淳之介、1960年)、22.「雁の寺」(水上勉、1961年3月)、23.「初夜」(三浦哲郎、1961年11月)、24.「砂の女」(安部公房、1962年)、25.「山本五十六」(阿川弘之、1965年)、26.「青春の蹉跎」(石川達三、1968年)、27.「塩狩峠」(三浦綾子、1968年)、28.「女武芸者」(池波正太郎、1972年)、29.「まゆ墨の金ちゃん」(池波正太郎、1972年)、30.「太郎物語高校編」(曾野綾子、1973年)

参考文献

- 岡崎友子(2010)『日本語指示詞の歴史的
研究』ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論
からみた日本語の指示詞」『認知科学
の発展』3
- 佐久間まゆみ(2002)「接続詞・指示詞と
文連鎖」『複文と談話』岩波書店
- 塩澤和子(2007)「文段分析の一考察(2)
—指示表現「こうした」「そうした」に
観察される統括機能—」『文藝言語研
究。言語篇』(52)
- 高崎みどり(1988)「文章展開における"
指示語句"の機能」『言語と文芸』(103)
- 馬場俊臣(2006)『日本語の文連接表現
—指示・接続・反復—』おうふう
- 路玉昌(2003)「指示副詞コウ・ソウの文
脈指示について —コウ・ソウが発話
動詞・思考動詞を修飾する場合—」『吉
備国際大学社会学部研究紀要』(13)
- (西北大学・同志社大学大学院)